

# Plus + プラス

2021 No.2

福岡県版

**特別寄稿** 子どもの学びをどう支えるか(2)  
—自己探究と他者とともに学ぶことを手がかりに—

- 教育実践**
- 『自立・自律に向かう自己指導能力』の育成  
—コロナに負けない“チーム南中”的教育活動を通して—
  - よりよい生活の実現に向けて生活を工夫できる力の育成  
—学校・家庭・地域の連携による「乳幼児ふれあい体験学習」「命の授業」を通して—

おじやまします 北九州市立 菊陵中学校 国際理解教育編

## 進路資料 令和3年度高校入試状況



菊陵中学校の国際理解教育

フクト

Plus + 「Plus(プラス)」2021年 No.2(通巻第52号)  
2021年6月11日発行

編集・発行 株式会社 フクト  
〒810-0022 福岡市中央区東院4丁目3番20号  
TEL 092-522-2910(代表) <https://ukuto-net.co.jp/>

フクトの教育情報誌『Plus』2021年第2号をお届けします。

特別寄稿は、イエナプラン教育の構造と特性を意識した自己探究と他者との学びについて紹介します。

教育実践は、「絆づくり」、「学びづくり」を基盤としたコロナ禍での『自立・自律に向かう自己指導能力の育成』の取り組みと、将来親になるであろう中学生が、学校・家庭・地域の連携により様々な体験活動をしたり経験豊かな方の講話を聞いたりすることで、親性や親準備性の育成を図ることを目指した家庭科と総合的な学習の時間、特別の教科道徳などを関連付けた授業実践について紹介します。

小誌に対するご意見・ご感想など、弊社営業担当者までお寄せください。よろしくお願ひいたします。



### ●北九州市立菊陵中学校

菊陵中学校では、「自分の良さや可能性を伸ばし、グローバル社会の中で夢に向かって心豊かにたくましく生きる生徒の育成」を目標に、持続可能な社会の担い手づくりを目指した教育活動が行われています。

フクト 非売品

# おじやまします

北九州市立菊陵中学校  
国際理解教育編

北九州市で最もにぎやかな小倉駅周辺の繁華街。菊陵中学校はその東端に位置し、帰国・外国人生徒の在籍が多い、国際色豊かな中学校です。北九州市では、日本語指導を必要とする帰国・外国人児童生徒数は平成16年度の29名から、令和元年度には84名となり、滞在国や母語は中国、韓国、フィリピン、アフガニスタンなど18か国にものぼります。菊陵中学校は市内の中学校で2つしかない帰国・外国人児童生徒教育センター校の1つです。そのため、校内の「国際教室」に市内全域から帰国・外国人生徒を受け入れ、適応指導・初期日本語指導だけでなく、JSL (Japanese as a Second Language) カリキュラム理論に基づいた実践研究が進められています。菊陵中学校では個別指導を中心で、専任教員と、生徒の母語に対応した市の日本語指導協力員が連携して指導にあたり、考查時の補助といった学校内でのサポートなど、困ったときに協力してもらっています。一方で、学校生活の中での日本語習得の機会も大切にされており、在籍学級での一般生徒とのコミュニケーションも積極的に図られています。

また、帰国・外国人生徒だけでなく、全生徒が異国の文化を学び、日本文化について再認識する取り組みとして、例年1年生を対象としてJICA研修員との交流会を行っています。令和元年度は19名の研修員を迎える、剣道や書道、折り紙、箸遣い、けん玉などの日本文化を紹介し、体験してもらいました。生徒たちは約1か月前から、役割分担や各体験の練習をして準備を進めます。各体験は、国際教室にも慣れていない生徒が多いため、在籍学級の生徒に教えてもらいながら練習を重ねました。生徒は交流に必要な英語を確認して、互いに言い合って練習をします。研修員がどのような方たちなのかという情報が届くと、朝自習や社

会の時間にJICAや研修員の出身国などについて調べ学習をしました。

当日、研修員の方たちを体育館に迎え、初めに歓迎



書道を教える生徒

式が行われました。学校長挨拶も生徒歓迎挨拶も、日本語と英語の両方で行われます。その後、各体験のデモンストレーションでは、どのような体験ができるのかを、実演を交えて2か国語で説明しました。剣道のコーナーの紹介では、剣道部員による演武が行われ、研修員だけでなく生徒からも歓声が上がりました。説明が終わると、いよいよ体験です。生徒たちがエスコートして、研修員を体験ごとのブースに案内します。生徒たちは、身振り手振りを交えたり、学習したばかりの英語を積極的に使ったりして研修員とコミュニケーションをとりました。箸遣いのコーナーでは、箸の持ち方から教えます。生徒が研修員の横に来て、同じ向きで箸と指の位置を見せながら英語で説明します。「上達したらこういうこともできるんだよ」と、皿から皿へ小豆を素早く移し替える様子を披露したり、箸とスプーンで競争したり。けん玉は、上半身だけでなく膝も使うのがポイントです。生徒はこの日のためにいくつか技も覚えました。折り紙のコーナーでは、新聞紙で兜を折ってかぶってみます。「こっちの端をここに合わせて…そう。」ツルの折り方は複雑なので、生徒の手元を見つめる研修員の目も真剣です。書道のコーナーでは、筆を使って「愛」という字を書いてもらいました。脇には自分の名前をカタカナで書き添えます。笑顔と笑い声の溢れる楽しい時間はあっという間に過



折り紙を教える生徒

ぎ、最後のお別れ式では記念品として、体験で書いた書道の作品と、折り紙、和傘のレプリカなどが贈られました。研修員の方たちからはお礼の言葉と、それぞれの方の国の文化の紹介、衣装の説明をしていただきました。

後日、JICAに寄せられた、帰国した研修員のメッセージには、「菊陵中学校での交流は思い出深いものであり、生徒たちのリアクションやジェスチャーから、自分と同じくらい、会えてうれしいと思ってくれていることがわかった」とあり、生徒たちの心からの歓迎が、研修員の方たちにも伝わっていたことがわかります。

菊陵中学校は、平成28年度にはユネスコスクール推進指定校に登録され、令和2年度からは北九州市のSDGs推進指定校にも指定されました。帰国・外国人生徒と一般生徒が互いの国や文化や課題に目を向け、持続可能な国際共生社会の実現を目指して共に行動していくように、実践的態度を養う取り組みが、上記JICA交流会のほかにも毎年多く行われています。

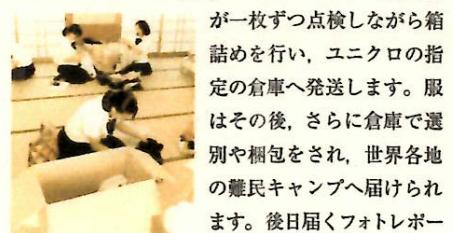
平成28年度からはユニクロ主催の「届けよう、服のチカラ」プロジェクトにも参加しており、着なくなった子供服を地域で集め、世界の恵まれない子供たちに送る活動にも取り組んでいます。国際理解とともに世界の貧困・人権・環境等の問題についても考え、「一人一人の力は小さくても皆で力を合わせることで、世界の平和や福祉に積極的に貢献できる」ことを学ぶための取り組みです。ユニクロの店長を講師に招き、服にはどのような「チカラ」があるのか、回収した服はどのように役立てられるのか、プロジェクトの意義や内容について説明を聞きました。その後、各クラスから2名程度の希望者を募り、実行委員会を結成します。前年度から続けて立候補する生徒が多いため、実行委員には1年間の活動内容を把握している生徒が多く、そのような生徒が実行委員長を務めるため、生徒の自主性に任せた活動ができるのだそうです。メンバーが決まったら、まずはボ

スター作り。市民センターや、校区内の小学校・幼稚園に掲示してもらい、回収の協力を呼びかけます。生徒が自分の出身校



「よろしくお願ひします」

にお願いに行くため、先生方は久しぶりに会った生徒の成長した姿に驚き、とても喜んでくださるそうです。回収する服は「0歳用から160cm用で、きれいに洗濯されており、金属製のパーツがついていないもの」など、細かい決まりがあり、これを専用の回収箱に集めます。活動が4年目になるころにはこの活動の話が広まり、近隣の地区からも服が集まるようになりました。集まった服は定期的に回収し、お願いした各施設では中間報告を行います。中学校内でも、全校集会、体育大会などで呼びかけを行い、生徒が自分の小さかった頃の服や、自分のきょうだいのお古を持ち寄って、令和元年度は3か月で1,931着もの服が集まりました。10月になると、集まった服の発送準備を始めます。中学校の和室に服を広げ、実行委員



が一枚ずつ点検しながら箱詰めを行い、ユニクロの指定の倉庫へ発送します。服はその後、さらに倉庫で選別や梱包をされ、世界各地の難民キャンプへ届けられます。

きれいに畳んで…トには寄贈の様子がまとめられているので、生徒たちは「来年も活動に携わりたい」という気持ちになるそうです。

菊陵中学校では、他にも国際理解教室として講師をお招きし、二胡に触れたながらの中国の文化の学習や、イスラム文化を正しく理解するための講演を行ったりもしています。生徒たちはこれからも様々な経験を重ね、未来を担う国際人として成長していってくれるのだと感じました。